

現代アメリカの国際収支分析と対外経済関係 —危機前の構造は、危機後に転換したのか再現したのか

立教大学大学院経済学研究科博士後期課程

星野智樹

2000年代の世界経済において、アメリカの経常収支赤字拡大の裏側で東アジアと産油国の経常収支黒字が構造的に拡大する「グローバル・インバランス」と呼ばれる現象の出現、BRICsとよばれる新興国の台頭がみられることに加えて、2007年のサブプライム危機とそれに続く金融危機・世界同時不況、ユーロ危機の発生による危機局面の到来のなかで、アメリカ経済および世界経済の変化（があるのか否か）が重要な論点になっている。

本報告では、経済の実物的側面と金融的側面の両面から一国の対外経済取引を網羅した統計である国際収支統計と、それに加えて、フロー統計である国際収支ではつかめない対外純資産（負債）残高・対外総資産残高・対外総負債残高およびその「評価替え」を測定できる対外資産負債残高のデータを用いながら、現局面¹におけるアメリカの対外経済関係、とくに国際金融におけるアメリカのポジションを検討する。その際、（楽観派・悲観派、賛成派・否定派を問わず）アメリカの経常収支赤字とその要因およびファイナンスの持続可能性を論点とした議論・論争が多いグローバル・インバランス論の研究には、世界経済やアメリカ経済の構造に関する指摘も多く含まれていることに着目して、この視点で同研究を捉え直して、本稿の課題設定に引きつけながら、適宜紹介したうえで参照していくことにする。

以上の検討を通じて、本報告では、国際金融におけるアメリカのポジションは、① 資本取引の規模の縮小や対外的な「キャピタル・ロス」が生じた2008年に一時的な調整が見られたこと、② 2009年以降にアメリカからの対外投資が「回復」したことにみられるように大きな構図は変化していない（「ポジティブ」な面のみならず、「ネガティブ」な面と一緒に「偏奇的」な形で残っている）ことの二つの側面を見る。この分析結果を、アメリカ経済と世界経済に変化があるのか否かという本報告の大きな論点と関連づけるならば、前者を強調してアメリカの「没落」を語ることも、後者を強調してアメリカの「健全さ」を語ることも誤りであり、2つの側面をあわせて考える必要性が示唆される。

¹ 分析の時期区分としては、2002年から2011年にかけての時期を大きな時期区分とし、2002年からサブプライム危機が生じた2007年、金融危機が生じた2008年、世界同時不況の局面となった2009年、そしてそれ以後とより小さな時期区分を設定する。